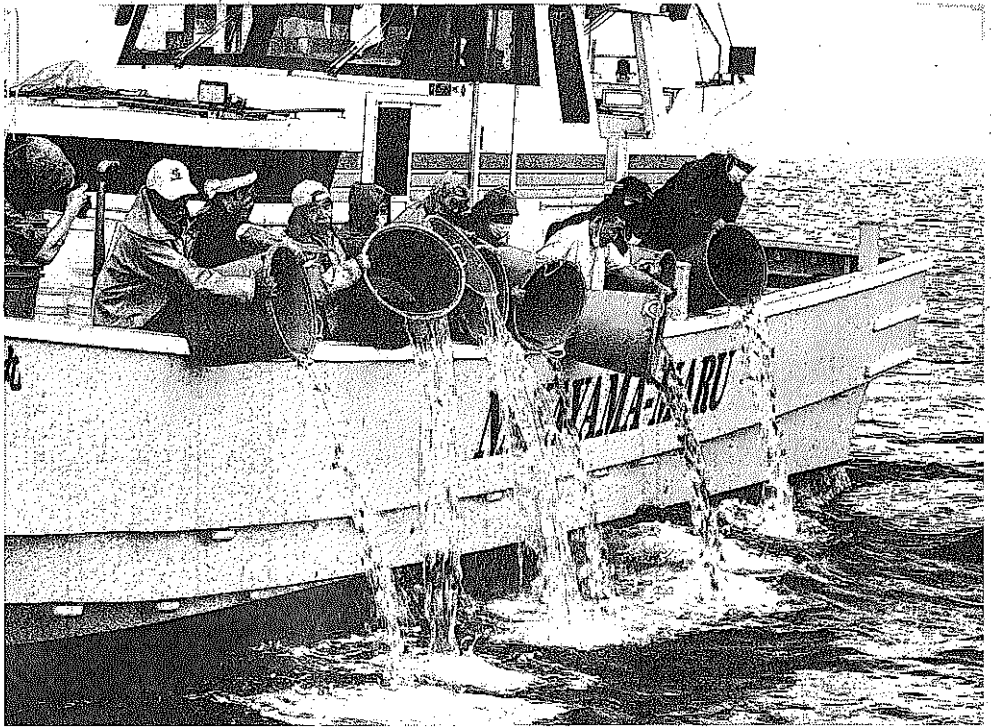


東京湾にマコガレイ



羽田沖浅場でマコガレイの稚魚を一斉に放流する組員

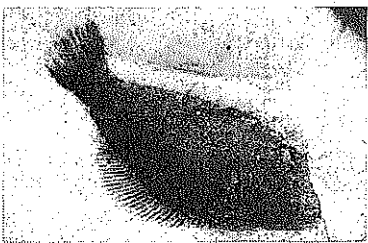
稚魚1万尾放流

東京湾遊漁船業協同組合

東京湾遊漁船業協同組合（飯島正宏理事長）は7月26日（火）、東京湾奥の羽田沖浅場にマコガレイの稚魚1万尾を放流した。

同日、大森・平和島の船宿「まる八」棧橋にトラックで運ばれてきたカレイの稚魚は、今年1月に山口県の下松市栽培漁業センターで生産された種苗。これを（公財）神奈川県栽培漁業協会を通じて同組合が入手したもので、体長は3・5～6cm。

同組合では、長年カサゴやメバルの放流を毎年行っているが、2017年4月に、初めてカレイの稚魚1万尾を羽田沖に放流。以来毎年放流事業



コロナ禍で第7波が全国的に急拡大が続いている状況で、さらに、この日はあいにくの雨模様となった。そうしたなか、

今年1月に生まれた稚魚の体長は3・5～6cm

稚魚は同組合の青年部を中心とした組合員17名によってトラックからバケツリレーで放流船に移され、午前9時過ぎ出船。15分ほどで羽田沖浅場に運ばれ、無事放流が実施された。

◆「江戸前の釣り」復活を目指して

東京湾のマコガレイは江戸前のカレイとして古くから人気があり、冬場のカレイ釣りは風物詩でもあったが、釣り場が次々に埋め立てられ、産卵場所も少なくなり、近年絶対数が激減。10年ほど前から乗合船の出船も激減してしまっ

同組合ではカレイに限らず、ハゼ、シロギス、アナゴなど江戸前の釣りの復活を目指して長年活動を行ってきたおり、そうした魚種の放流も課題

となっているが、江戸前を代表する魚種のなかで種苗が入手できるのは今のところカレイだけで、そのカレイの種苗確保についても毎年苦労している状況だ。

「マコガレイは、東京湾で激減した魚種の代表格。組合としては、今後種苗が手に入れば、放流を毎年続けていきたい」（飯島理事長）としている。

今回放流したカレイの稚魚は体長3・5～6cm。成長はゆっくりで、20cmを超えるまで3年ほどかかる。同組合による最初の放流から5年が経過しており、そろそろ釣りごろに育ったカレイもいるはずなのだ。